

近代作家研究叢書 5

監修／吉田精一

島崎藤村の文学

伊藤信吉著

解説／垣田時也

日本図書センター

島崎藤村の文學

初刷五千五百部



昭和十一年二月十五日印刷
昭和十一年二月二十日發行

定價一圓五十錢

著者 伊藤信吉

刊行者 東京市麹町區三番町一
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一
第一書房

電話九段三三四四
振替東京六四二二三

東京市神田區三崎町二ノ二三
印刷者 堀内文治郎
製本者 橋本久吉

目次

島崎藤村の文学

伊藤信吉

1

『島崎藤村の文学』出版をめぐる回想

伊藤信吉

1

解説

垣田時也

(1)

序

いまから恰度八年前の晩春の温かい夕暮、私の家にひとりの脊丈の矮い、眼のぎよろりとした一癖ありげな若い人物が訪ねて來た。この人物は上州の前橋在に住み萩原朔太郎君の紹介狀を携へてゐたが、私は書齋にあんないせすに散歩に出掛ける時刻なので、外につれ出して一緒に歩いて行つた。歩きながら話をするといふことは奇想天外の考へに打つかることもあり、この人物を観察するうへにも、何か書齋で話をするよりも、もつと直接に彼の眼付や話振りを洞察力を見徹せる氣持があつたからであつた。

一見ぎよろりとした眼付はそれを通り越したところに、柔和な正直さうな瞬きと謙遜の情があらはれてゐて、警戒しなくとも好いところの私は私の見當違ひの好個の人物を感じたのであつた。後の日に萩原朔太郎君に會つてかういふ人がたづねて來たといふと、あれは鳥渡見ると一癖ありさうだが、それとは反對に好い人間なんだよと云つてゐた。

それ以後、この問題の人物であるところの詩人伊藤信吉君は皮肉とか慚意とか傲慢とか背徳とか、さういふものとは凡そ背中合せの資質の人間であり、そして酒も飲まない寧ろ眞摯すぎる人であることを知つた。私の家に前橋から出て來て滞在してゐる間でも、殆、終日何か知ら原稿紙をひろげて、書きほじくつてゐた。凝性と几帳面なところと、人に愛される溫良さに加へて何か頼もしい信據すべきところがあつた。

マルクス主義文學華やかなりしころ、趁はれて故郷にまる三年くらゐ滞在して謹慎してゐたが、その間にこの書物が彼によつて書かれてゐたものであり、蟄居中でも、何か研究せねば居られない手固い氣質がこの龐大な書物を爲さしめたものであらう。原稿紙で六百餘枚、そして日本に於ける作家研究の上では量の上からも、何人も爲さざる丁寧懇切な批評であり、又再び求められない根氣の深い書物であることを知つたのである。

昭和十一年正月末

室 生 犀 星

目次

序	小題一言	島崎藤村
	室生犀星	

築かれた世界

老年の風格	一七
老年の境地から	一七
民話の風格	二六
文章論	二九

『藤村全集』の序文	三五
浪漫的精神	三九
挿話として	四五
芭蕉と一茶	五〇
一つの風俗	五五
内部と外部	六一
家系の性格	六二
土地の愛	六六
リアリズム論	七四
作品の振幅度	八二
文學遺産に就て	八五
フランス紀行	九三
文學營爲の建築	一〇〇

7

精神史の一瞥 一〇九

道德の系譜圖 一〇
基督教時代 一七
生の否定と肯定 二三
自意識の追究 二九
「新生」の彼岸 三五

作家營爲の歴史 一四一

藝術的方法の輪廓 一四一
散文精神の萌芽 一四六
主情性の位置 一五一
獨自性の組成 一五七

寫實性の人生的定着。。。。。。。一六二
 リアリズムの完成。。。。。。。一六八

作品論

『破戒』をめぐる回顧と感想。。。。。。一七七

悲劇の時代性。。。。。。一七七

作品の心理。。。。。。一八四

社會性と主情性。。。。。。一九一

『春』並びに『櫻の實の熟する時』。。。。。。一九九

青春の頌歌と憂愁。。。。。。一九九

相似性と差異性。。。。。。二〇六

浪漫的眞實と人生的眞實。。。。。。二一二

『家』の性格と憂鬱性。。。。。。二二一

人生的決意の必然。。。。。。。。	二二一
自然主義との關係。。。。。。。。	二二六
人生の囚はれ。。。。。。。。	二三一
暗さと溫かさ。。。。。。。。	二三六
『新生』斷想。。。。。。。。	二四二
懺悔をめぐつて。。。。。。。。	二四二
愛と誠實と懺悔と。。。。。。。。	二四八
新生と哀別離苦の相。。。。。。。。	二五六
『嵐』『分配』——一聯の作品。。。。。。。。	二六三
轉回の一時期。。。。。。。。	二六三
『嵐』並びに『分配』。。。。。。。。	二七〇
一聯の作品。。。。。。。。	二八〇

詩人論

千曲川旅情の歌・・・・・・・・二八九

詩人としての藤村・・・・・・・・二九八

「草枕」のあけぼの・・・・・・・・二九八

『若菜集』時代・・・・・・・・三〇五

抒情性と浪漫性・・・・・・・・三一二

青春の挽歌・・・・・・・・三二六

作家意欲の社會性

北村透谷との交友・・・・・・・・三三五

文學的交友の焦點	三三五
透谷とその悲劇	三四〇
遺産の繼承	三四六
『春』の透谷と藤村	三五二
意欲の社會性	三五八
思想性と社會性	三五八
先驅的作家への志向	三六四
民衆への愛	三七〇
人道的精神	三七五
人生的欲求と社會的意欲	三八〇
作品の社會性	三八五
作品機能の永續性	三八五
一、『千曲川のスケッチ』の觀點	三八八

スケツチの背面。。。。。。。。。	三八八
自然と人的關係。。。。。。。。。	三九二
風物の語る思想。。。。。。。。。	三九八
二、『破戒』の史的位置。。。。。。。	四〇三
時代の文學の創造。。。。。。。。。	四〇三
作家精神の民主性。。。。。。。。。	四〇八
二つの先驅的意義。。。。。。。。。	四一三

歐洲文學との交渉。。。。。。。。。	四一九
-------------------	-----

明治文學の一過程。。。。。。。。。	四一九
交渉の經過と形式。。。。。。。。。	四二七
社會的作品の消化。。。。。。。。。	四三四
交渉の深化。。。。。。。。。	四三九

ロシア文學との關聯。。。。。。。。。	四四七
--------------------	-----

『夜明け前』論

ツルゲネーフとの親近。。。。。。。。。四四九
 トルストイ的なものに就て。。。。。。。。四五九
 ドストエフスキーを回つて。。。。。。。。四六五

巨大なる記念碑。。。。。。。。四七三

作家營爲とその意圖。。。。。。。。四七三
 醇化された境地。。。。。。。。四七八
 歴史と作家的創造。。。。。。。。四八五
 維新史の集約。。。。。。。。四九〇
 思想の時代的性格。。。。。。。。四九六
 歴史の意思。。。。。。。。五〇一

馬籠宿の位置	五〇一
青山半藏の肖像	五〇六
歴史の意思	五一二
宿驛の推移	五一八
理想の悲劇	五二六
新時代の相貌	五二六
「叢の中」から	五三二
悲劇の人	五三八
續・悲劇の人	五四三
年譜	五五一
覺書	五六四